



先見性

—後藤新平の先見性とその影響—

Foresight

- Shinpei Goto's Foresight and His Influence -

弁護士・法学博士
小野昌延

Shoen ONO
Attorney at law
Doctor of Laws

はじめに

大阪の地下鉄には謎のトンネルがあると言われている。

しかし、私にとっては、幻でも謎でもなんでもない。

大阪市営地下鉄の梅田駅の改修の際、我々が壁と思っていた、その壁の、その向こうに、改修前の駅の大きさ以上に、大きな大きな穴が掘ってあった。

「大阪市営地下鉄の梅田駅に、昔掘った穴があった」という新聞記事を読んだ。そのとき、思わず思い起こしたのは角源泉（以下敬称略）のことであった。それは有名な歌人であり、当時の朝日新聞副社長であった下村海南の角源泉に対する弔辞を私が読んでいたからである。角源泉・下村宏両名は共に、内務官僚として台湾に渡り、大規模な都市政策に従事した。台湾総督である後藤新平に従って、台湾に行き、また、後藤は続いて南満州鉄道総裁になって、大連（瀋陽）の都市計画の実行に当たった。後藤新平は後に帝都復興院総裁となって、広大な計画によって「大風呂敷」といわれ、今なお注目されている政治家である。

私は昭和30年（1955年）角恒三法律事務所に入った。そして、数年後に角恒三弁護士が亡くなられたとき、旧朝日ビルにあった事務所は、一応朝日新聞社に返還された。労働事件を主としていた継続事件などは坂口春男弁護士が継続した。私は知的財産事件を専門にしようとして、既に独立していた。しかし、半年ほど前の角事務所で坂口弁護士と共に事件の引継ぎをしていた。また、その後も2・3の重要民事事件は、角恒三弁護士と共に担当していたので、事務所の記録・文書などの整理に、諸先輩の指示のもとに協力した。

そのとき、古い雑誌類は貰ってよいと言われ、数冊の「法律新聞」の合本を選択した。

事務所には古い、最近誰も読んでいないフランス語の新聞が沢山あった。それで、角源泉弁護士がフランス語の新聞を常に読んでおられていたことが分かった。しかし、フランス語が全く読めない私には、貰いうる新聞・雑誌のうちに、フランス語のものを選択する動機は全くなかった。整理していると、朝

日新聞の下村海南副社長の角源泉に対する弔辞があった。情報局総裁であった下村宏（本名）でなく歌人の雅号である下村海南名であったと思う。その弔辞に眼を通した。友情にあふれ、歌人としても有数であった彼に相応しい、実に名文であった。しかし、これは御遺族の保存されるべきものと思い、読むに留めた。多量のフランス語の新聞・雑誌類や下村海南の弔辞の行方を、その後、全く知らない。

朝日新聞の副社長であった下村海南の弔辞のなかに、角源泉が常に郵便葉書と矢立・筆を持ち、電車の中で一筆書いて、朝日新聞に送っていた事実をユーモラスに述べていた。

他方、朝日新聞社から時折、投書に対する御礼を持ってきていたと、古参事務員や先輩弁護士から聞いていた。どんな投書であったか、だれかに聞いてみたいものである。

角恒三の養父であった角源泉は、私の事務所入所時には、既に亡くなっておられた。しかし、漏れ聞くところによると、その気宇壮大な性格から、地下鉄梅田駅の広大な洞穴には、どうも角源泉が関係している。それは、また帝都復興院総裁後藤新平の影響をうけていると思われた。

大阪市電気局長角源泉

私は洞穴は、大阪電気局長であった角源泉の先見性のもとに掘られたものに違いないと直感した。皆は現在の職制で考えている。「大阪市長は選挙で選ばれ、大阪電気局長は市長が任命する。大阪電気局長は大阪市の地域内の仕事だけしている」などである。「大阪電気局長が大阪市を超え、和歌山県、三重県、兵庫県の私鉄を監督したり、京都府や岐阜県の発電所の監督をしたりする」などは、越権行為だなどと考える。

しかしそうではない、大阪市電気局長が、これらの私鉄や発電所の監督をしていたのである。戦前に、和歌山市電気局長などはない。大阪市長と大阪市電気局長は上下関係にない。大阪市電気局長の任命も大阪市長がするのではない。両者は同格に近い官僚である。

というのは、先輩弁護士連から、こんな話を聞いていた。「御堂筋は関市長の功績になっているが、はじめは関市長も反対であった」とか、「当時大阪市電気局長は、関西一円の電力会社に監督権限があった。また、関西一円の私鉄に対する監督などと権限が広がった。そして、市長と給料が同額であった」などと伝え聞いていた。御堂筋計画のごとき、一つの街を立ち退かせるような計画は、当時常識的には必要かどうかすら問題であったろう。こんな途方もない計画には、当然家の立ち退きを受ける者は反対するであろうと予想される。また、御堂筋を造った結果、その両側の者は離れ離れになる。隣には家がなくなる。それまでの商売の状況と状況も異なり変化する。「こんな無謀な計画では商売上差し支える」と反対する者も極めて多いことが予想される。当時は、自動車など一般的でない時代である。普通は4メートルもあれば道幅として十分な時代に、40メートルを超える道を造ろうというのでは、「何のためにそんな一つの街を潰すようなことをするのだ」と強く反対するであろう。常識的に考えれば、こんな途方もない大計画を聞いた瞬間には、当初は誰でも反対するであろう。事実市民は「市長は船場の真ん中に飛行場でもつくる気か」と言ったという。また、予算の大半は立退き料であった。

しかし、当初は瞬間反対していたとしても、そのうち都市計画に関する該博な学識から、先見性をもって、これに賛同し、大阪の将来の為に、積もる困難を次々に排していったのは、まさしく異色学者市

長であった、関市長の功績である。角源泉も、大阪市民も幸せであったといわねばならぬ。

御堂筋拡幅の大事業

関市長は実施に当り、住民の反対や、地勢的困難に遭遇したことが伝えられている。先見性のある二人はこの困難の排除にあい協力していったものと想像される。関一大阪市長は明治6年(1873年)に生まれ、社会政策学者・都市計画学者でありながら第7代大阪市長をつとめた異色の官僚・政治家である。同人は旧幕臣の小学校教員の家に生まれ、高等商業学校(現一橋大学)を卒業した後、1897年母校の教授となった。1910年には法学博士を授与されている。「都市計画」という語は、彼が最初に使ったとも言われる。彼は、1914年池上市長の補佐として大阪市助役に招かれ、1923年に第7代大阪市長となった。そして市長として、多くの功績をあげた。特に、御堂筋の拡幅、地下鉄の建設は同人の功績とされる。しかし、その発端は大阪電気局長の角源泉の提案に発し、これに対して異色の関学者市長の賛同を得、あい協力したと見るべきであろう。

関市長の「都市大改造計画」の中心は御堂筋の拡幅工事である。それは当時の常識から言えばありえない大事業であった。それまでの御堂筋は、幅6メートル、淡路町から長堀まで約1.3キロメートルの狭く短い普通の道であった。その御堂筋を幅43.6メートル、南北に延びること約4,027メートルの道に拡幅するという関市長の考えに対して、市民は「市長は船場の真ん中に飛行場でもつくる気か」と肝をつぶした。同時に、強い反対論が起こった。しかし、その計画は将来を先見していた。構想は道路の拡幅だけでなく、道路の下に地下鉄を走らせるというものであった。これが総べて関市長の功績とされ、大きな洞穴は謎とされている。しかし、御堂筋が開通したのは「昭和12年」、下を走る地下鉄の開通は一足早く、梅田～心斎橋間が「昭和8年」に開通している。地下鉄開設の申請は、さらにその前に鉄道省になされていた。これの着想が角源泉にあり、その根源が後期のとおりに後藤新平伯の影響下にあることは明らかである。関市長は御堂筋の拡幅が大阪の発展のために、どれだけ有益であるかを市民に説き続けた。関係者も住民に立ち退きに同意してもらうまで、何度でも頭を下げて訪れたという。

後藤新平の影響

下村海南と角源泉は、同列の関係ではなく、下村海南が先に台湾総督府に勤務し、かつ角源泉の上司であった。下村海南が同郷のよしみで推薦したものと思われる。下村海南の本名は下村宏である。下村宏は歌人としても知られている。下村海南の名で多くの作品を著しており、下村海南の方が有名な位である。同人は終戦時の内閣情報局総裁であり、ポツダム宣言受諾の実現に尽力した。昭和天皇の玉音放送の立役者としても知られている。台湾では、すでに述べたように下村宏(海南)を抜擢した。下村は歌人としても知られ、下村海南(しもむら かいなん)の名で多くの作品を著している。彼は旧制第一高等学校、東大卒業後明治31年(1898年)逋信省にはいった。そして、逋信省為替貯金局長のとき、大正4年(1915年)台湾総督府総務長官となった。彼は後に大正10年朝日新聞に招かれ、昭和5年には朝日新聞副社長になり終戦直前の昭和18年には日本放送協会会長となっていた。彼は、終戦の際には内閣情報局総裁として、ポツダム宣言受諾のために尽力した。特に昭和天皇の玉音放送の主役として有名で

ある。彼は和歌山県串本の出身で、隣りの新宮出身の角源泉を引っ張ったとおもわれる。

後藤新平は、仙台藩（水沢藩）・陸奥国胆沢郡塩釜村（現在の奥州市）出身である。留守家家臣・後藤実崇の長男として生まれたが、胆沢県大参事であった安場保和に認められた。このことが、生涯に大きな機会を与えた。しかし、本人の才能もあり、当時の環境が、今の時代には考えられない地位を彼に与えている。すなわち、13歳で安場の書生になり、県庁に勤務し、東京太政官少史門番兼雑用役となった。安場が岩倉使節団に参加して帰国した直後に福島県令となった。後藤はこの機を逃がさず安場を頼って16歳で福島洋学校に入り、17歳で須賀川医学校に入学した。此のあたりは今でも考えられる。卒業後、山形県鶴岡の病院勤務が決まっていたが、この時そのまま山形に行っておれば案外平凡な一生であったかも知れない。しかし、安場が愛知県令をつとめた機会を後藤は逃がさなかった。そして、今日では考えられない地位に就いた。すなわち、愛知県医学校（現・名古屋大学医学部）の医者となり、24歳で学校長兼病院長となった。すなわち、現在で言えば名古屋大学医学部長、兼、付属病院長である。

この時、遊説中に暴漢に刺され負傷した板垣退助の治療に当たっている。「板垣死すとも自由は死せず」との名言が伝えられる、あの事件である。現場に行った後藤は、板垣の立派な洋服にメスを入れ、ズタズタに切り裂いたと言われる。目的から当然のことであろうが、オロオロうろたえていた皆を驚かせたという。

彼は明治15年（1882年）、愛知県医学校での実績を認められて内務省衛生局に入り、行政に従事することになった。明治23年にはドイツに留学し、研究の成果を認められて医学博士となった。そして、内務省衛生局長のとき、日露戦争の名参謀児玉源太郎が台湾総督となると、後藤は抜擢され、女房役である民生官になった（明治31年・1898年）。ここで、彼は、地の利を得て、気宇壮大な気質を十分発揮した。それと共に、官僚の近代化、その育成にあたった。

後藤は、徹底した調査事業を行って現地の状況を知悉した上で改革を進めた。「ひらめの眼は鯛の眼にはならぬ」という現実調査と合理主義である。同時に人材の招聘にも力を注いだ。その一例が新渡戸稲造の招聘である。新渡戸は、明治34年当初殖産課長として赴任するや、砂糖きびや薩摩いもの台湾での普及に大きな成果を残している。後藤は、後に台湾総督になって、今度は補佐に中村是公を登用した。しかし、台湾に比べ中国東北部（満州）での後藤新平の影響は少なかった。後藤は南満州鉄道総裁にすぎなかった。そこには、強い陸軍の武力を背景に持った関東軍が居た。そこで、大連などの都市計画などについては、ヨーロッパ留学派も中国に貢献した。しかしながら、知性派も武力を背景にした関東軍に対しては、敗退するほかなかった。自由主義的なにおいのするところは、後に「満鉄調査部」しか残らなかった。

台湾にとっても後藤新平が台湾総督になったことは幸せであった。今日の台湾の日本に対する友好的態度も、児玉源太郎の人選以後の日本の良好的な人脈の人々の努力によるところが大きいと思われる。

帝都復興院総裁

後藤は、続いて明治39年（1906年）、南満洲鉄道初代総裁に就任し、大連を拠点に満鉄経営に活躍した。ここでも後藤は中村是公ら台湾時代の人材を多く起用した。後藤は僅か一年半の短い在任ながら、

30代、40代の若手の優秀な人材を招聘し、南満州のインフラ整備、衛生施設の拡充、大連などの都市建設に当たって影響を残した。また調査事業が不可欠と考え、満鉄内に調査部を発足させているが、この調査部は後々まで、影響を残した。

しかし、台湾での影響に対して、中国東北部（満州）での後藤新平の全体的影響は少なかった。後藤は、在任わずか1年半であったし、また、南満州鉄道総裁にすぎなかった。満州には、これより影響の強い陸軍の武力を背景に持った関東軍がいた。後藤影響下のフランス留学派は大連などの都市計画などについて南満州に貢献もした。しかし、知性派は、武力の関東軍に対して、敗退するほかなかった。自由主義的な匂いのするところは「満鉄調査部」しか残らなかった。このような結果も、すべて陸軍の関東軍・満州国官吏のリーダーの先見性がなかったことに起因するといえよう。

関東大震災後の第2次山本内閣では、内務大臣兼帝都復興院総裁として震災復興計画を立案した。それは大規模な区画整理と公園・幹線道路の整備を伴うもので、13億円という当時としては巨額の予算（国家予算の約1年分）のため財界等からの猛反対にあった。議会が承認した予算は5億7500万円に過ぎず、当初の計画を縮小せざるを得なくなった。それでも、現在の東京の都市の骨格、公園や公共施設の骨格は、この復興計画に負うところが大きい。

後藤は、オスマンパリ市長が行ったいわゆるパリ大改造を参考に都市計画を考えた。道路計画に当たっては、放射状に伸びる道路と環状道路の必要性を強く主張した。そのため計画は縮小されたが部分的に建設された。昭和通り、靖国通り（当初の名称は「大正通り」）、環状線として明治通りなどである。当初の案では、主要街路の幅員は70mから90mで、中央には緑地帯を持つものであった。大規模な計画は当時意義が理解されなかった。

下町地区の震災での消失部分では帝都復興事業以降に新たな街路の新設が行われておらず、帝都復興の遺産をそのまま利用している状況である。しかし、昭和通りは、建設当初は大阪の御堂筋に匹敵するような、街路樹や緑地帯を備えた道路であったにも関わらず、交差点の地下立体交差や高架道路の建設により、後藤の意図したようなゆったりした緑の多い街路としての性質は、逆に昭和40年代以降失われてしまった。後藤は東京市長時代に、永田秀次郎や、前田多門のような、更に後に影響を残す、俊秀を育てている。

また、鉄道院は地盤から見て東京には地下鉄は無理だとしていた。これに対して地下鉄の父といわれる早川徳次は、「東京に地下鉄を作りたい」という先見性のある構想をもっていた。後藤はこれに理解を示していた。東武鉄道根津嘉一郎の支援のもとに始めた早川徳次の行動に対して、後藤は数少ない支援者の一人として濫沢栄一などと共に名を連ねていた。このような事実も、角源泉の行動になんらか影響しているのではなかろうか。

むすび

現在の台湾の日本に対する態度についての良好な風土と、中国東北部の日本に対する風土との違いは、為政者の先見性の違いが影響している。誰がトップであるか、かれの先見性によって、後世これだけの違いが生じてくる。角源泉という大阪市電気局長が、大阪の地下鉄に関係していることは理解できたこ

と思う。それが、後藤新平の良い影響のもとに育ったことは明らかである。御堂筋の下に走る東京にも無い高い天井のシャンデリアを持った優れた地下鉄の存在は、後藤新平の先見性、これに影響された角源泉の発想、これを理解した関一の見識と包容力を抜いては考えられない。

大阪市民も角源泉を通してえられた後藤新平や下村海南の先見性の恩恵を受けている。大阪梅田駅地下の謎の大きな洞穴、立派な地下鉄幹線の謎は、このような歴史を理解することによって、謎や単なる幻ではなく、気宇壮大な精神の一部の表れであることが明らかになったことと思う。